
小京都から京都の魅力を再発見

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

プロジェクトの名称は「小京都から京都の魅力を再発見」である。全国京都会議が承認した小京都が日本全国に点在しており、令和3年4月現在、全国京都会議に加盟する自治体は40市町となり、共同宣伝パンフレット・ポスターの作成・配布など、広域観光キャンペーンを展開するほか、年1回の総会を加盟市町持ち回りで開催している。しかしながら、近年、ピーク時の1999年56市町から減少傾向が続いている。その現状を踏まえて本プロジェクトの目的は3点ある。

1 点目として京都にゆかりのある私たちが、京都ならびに小京都の素晴らしさを発見し、価値を見いだす活動を行っていきたいと考えたためである。

2 点目として構成員は、全員社会領域専攻であり、地理学で学習したことを活用することで学び続ける教員であることを体現すること、京都に対して「地域愛」を持つということを含めて観光資源に対する研究を行うことである。

3 点目として最新の教育情勢を鑑みると、「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」では、自由な研究テーマから自分で着眼点を選択し、調査していくことが求められる。求められる力を自ら体験することで指導に役立てていくということも含まれている。

2. 代表者および構成員

・代表者

平岡慎也 社会領域専攻 2回生

・構成員

小森洋志 社会領域専攻 2回生

中川敦貴 社会領域専攻 2回生

3. 助言教員

香川貴志先生 (社会科学科)

第2章 内容や実施経過など

1. 本プロジェクト実施過程について

- 5月 プロジェクト発足
- 6月 計画並びに予算案提出
各調査項目、アンケート用紙の作成
- 8月 初回のフィールドワーク延期
- 8-9月 延期したフィールドワーク中止
- 10月 23日 高梁市フィールドワーク
24日 たつの市フィールドワーク
30日 伊賀市フィールドワーク
31日 金沢市フィールドワーク
- 11月 6日 京都市フィールドワーク

フィールドワークは、何度か延期になりつつも計画地点全てで行うことができた。主にフィールドワークで行ったことは、街並みを歩いて雰囲気を感じ取ること、現地の人や観光客に対するアンケート調査である。

2. 本研究における着眼点について

本研究はフィールドワークを中心に進められ主に各地点での着眼点は、3点おいた。

1 点目が、小京都認定を受けた理由、京都との類似点に関する調査である。これは主に街並み、伝統、文化、祭事といった事に関してである。

2 点目が、小京都であることでの観光資源としての魅力である。主にアンケート調査を実施した中で小京都への興味や関心に関して聞き取り調査を同時に行った。

3 点目が、小京都の知名度である。そのためその地で生活をしている幅広い年齢層の方々にもアンケート調査を行い、実際に小京都がどのくらい知られているのか調べた。

3. アンケート調査について

アンケートは質問項目が多くなる場合回答率も下がるためシンプルなものを作成した。(写真1参照)

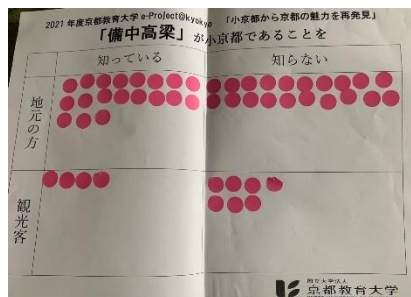


写真1
アンケート調査用紙

各地点での小京都として認定されていることを知っているか、をそこで住む現地の方と観光客とで分けた。各地点からそれぞれ50人アンケート調査を行った。

第3章 結果や成果など

3-1. 備中高梁

備中高梁を調べていくと、街並みに関して商家の並ぶ本町通りや、美観地区に指定されている紺屋川筋といった歴史を感じさせる建物が並んでいた。また、街全体が山に囲まれていて盆地であることが感じさせられる。また鴨川を彷彿とさせるような高梁川が街の近くを流れていた。盆地、川、街並みを通して京都に相通じているような印象を受けた。

また伝統として雛人形作りが盛んであり、そこで西陣から「金襴」という素材を取り寄せていることがわかった。

アンケート調査結果、そして、聞き取り調査内容を受けてアンケートを行なっていくと、若い世代の知名度が低く年齢層が上がることで知名度が高くなることが読み取れた。ここには、地域でのつながりや家族の形が変化し伝承の機会が少なくなっていることが関わっている。

備中高梁		知っている	知らない
全体		50	26
性別	男性	26	12
	女性	24	14
住まい	現地	39	20
	観光客	11	6
年代	10代	13	13
	20代	7	6
	30代	3	2
	40代	4	2
	50代	7	1
	60代	6	0
	70代	6	1
	80代	4	1

図1 備中高梁アンケート結果

聞き取り調査より小京都に関する人々の思いが読み取れた。

聞いたことがなかった (現地、10代)

小京都自体がまずわからない (現地、10代)

昔から小京都と呼ばれ誇らしい (現地、70代)

小京都ということは小さい京都ということでその小さいという部分が、なんともいい気持ちにはならない (現地、60代)

—観光資源として—

街並みとかが好きなので小京都ということも調べて観光に来ました (観光客、30代)

小京都に関連していろいろ回っています

(観光客、60代)



写真2

備中高梁の街並み

2021年10月23日 備中高梁にて 小森撮影



写真3

風情ある休憩所

2021年10月23日 備中高梁にて 小森撮影

3-2. たつの

たつのは「播磨の小京都」とも呼ばれており、市街には武家屋敷や白壁の土蔵が今もなお残されていた。また古くから交通の要衝でもあり、揖保川の清流も現存し、醤油や素麺といった伝統的産業の継承についても行われている。

アンケートを行なっていくと、若者の認知が比較的高いことがわかった。これは「播磨の小京都」としての地域学習、あるいはパンフレットの発行等を

通して紹介していることが影響している。

たつの			知っている	知らない
全体		50	29	21
性別	男性	26	17	9
	女性	24	12	12
住まい	現地	39	27	9
	観光客	11	2	12
年代	10代	10	4	6
	20代	7	3	4
	30代	4	1	3
	40代	3	1	2
	50代	7	3	4
	60代	12	12	0
	70代	6	4	2
	80代	1	1	0

図2 たつのアンケート結果

聴き取り調査は以下の通りである。

小3の社会で醤油についての学習を行なったときに聞いた記憶がある（現地、10代）

パンフレットで見る機会があった（現地、40代）

また重伝建（重要伝統的建造物群保護地区）にあてはまる地区の人の中では賛否がある。

飲食店に関連する人は以下のように話す。

観光客が集まり賛成だが、住民としては生きづらさを感じることもあり反対の人もある（現地、70代）
—観光資源として—

小京都巡りで訪問した（観光客、40代）

私は小京都であることを知って来ているが、まだまだアピールが足りないと思う（観光客、50代）



写真4

童謡の里・播磨の小京都を看板でアピール
2021年10月24日 たつのにて 小森撮影



写真5

「たつの」の街並み

2021年10月24日 たつのにて 小森撮影

3-3. 伊賀上野

伊賀上野について調査を進めていくと、街並みに関しては、江戸時代に基盤目状に整備された城下町が現在でもその面影を残し、京都をイメージする景観となっている。また、伊賀忍者・伊賀流忍者発祥の地として忍者の街としての地域振興に努めており、伊賀上野に対しての見方として、小京都というより忍者の街としての印象が強い傾向が見受けられた。

また、毎年10月下旬に開催される上野天神祭(ユネスコ無形文化遺産/国指定重要無形民俗文化財指定)では、城下町伊賀上野を神輿やだんじりが練り歩き、伊賀上野の秋の風物詩となっている。この上野天神祭のだんじりは、京都の祇園祭の山鉦に似ており、祇園祭の形態を取り入れつつ独自に発展してきたことがわかった。

アンケート調査を行った結果、「伊賀上野は小京都である」という認識が低いという結果が得られた。

伊賀上野			知っている	知らない
全体		50	7	43
性別	男性	28	3	25
	女性	22	4	18
住まい	現地	18	7	11
	観光客	32	0	32
年代	10代	5	0	5
	20代	8	0	8
	30代	4	1	3
	40代	11	1	10
	50代	10	3	7
	60代	10	2	8
	70代	2	0	2
	80代	0	0	0

図3 伊賀上野アンケート結果

アンケートに回答していただいた中で9割程度の

方々は伊賀上野が小京都であるということを認識していなかった。その一方で、伊賀上野が忍者の街として認識している方が小京都の認識度よりも高いという結果が得られた。地域として小京都と宣伝を行うよりも地域資源である忍者の宣伝を行うことで、独自の観光資源を活かしているということが理解できた。

- ・伊賀上野は小京都なのか (観光客、60代)
- ・小京都好きの人への切り口としての小京都 (現地、60代)
- ・忍者という資源を活かす (現地、60代)
- ・伊賀上野は忍者の街として有名 (観光客、40代)
- ・京都から見習うこともたくさんある(現地、60代)



写真6

伊賀上野城

2021年10月30日 伊賀上野にて 小森撮影



写真7

上野天神祭で用いられるだんじり

2021年10月30日 伊賀上野にて 小森撮影

3-4. 金沢

今回の調査では、小京都に加盟している自治体と小京都を脱退した自治体の認知度の比較等を行った。そこで私たちは小京都を脱退した金沢市(以下、金沢と記す)について調査した。

金沢は平成20年度末をもって全国京都会議から脱退しており、現在は、城下町金沢の歴史資産を活かしたまちづくりを進めることを明確にし、国から歴史都市としての認定を受けている。そのことを踏まえ、金沢での調査を進めていくと、加賀藩前田家の城下町として栄えた美しい街並みや建物が多く残っており、城下町金沢としての風貌を感じることができた。また、ひがし茶屋街には、美しい出格子や石畳が続いており、京都の祇園を彷彿させる印象を持った。さらに、調査を進めていくと、歴史的な観点から京都と金沢の大きな違いがあり、京都は「武家文化」金沢は「公家文化」という文化の違いがあることが理解できた。

アンケート調査を行った結果、「金沢は小京都である」ということを誤認識している方々が非常に多かった。つまり、金沢が小京都から脱退したという事実を知らない方々は非常に多いということである。

金沢		知っている	知らない
全体		50	37
性別	男性	25	20
	女性	25	20
住まい	現地	21	20
	観光客	29	17
年代	10代	7	4
	20代	4	0
	30代	2	1
	40代	7	4
	50代	5	3
	60代	6	6
	70代	16	16
	80代	3	3

図4 金沢アンケート結果

このアンケート結果を踏まえ、金沢市観光政策課に小京都に加盟したことによるデメリットを問い合わせると、「未だに多くの方々が金沢は小京都というイメージを持っている」という回答を得た。結果として、観光に関する施策を進める自治体が市民や観光客に対して金沢は小京都というイメージを払拭させることが歴史都市として認定され10年以上経った現在でも難しいということが理解できた。さらに、独自の観光資源を活かしていこうとする金沢の取り

組みは、これからの時代に不可欠なものとなっていくのではないかと考える。

- ・金沢が小京都から脱退したことは知らない
(現地、70代)
- ・金沢らしさをもっと前面に出してほしい
(現地、40代)
- ・金沢が小京都を脱退したことを知っている
(現地、60代)
- ・金沢は都になってない
(現地、60代)
- ・ウェブサイトで金沢を調べて来た(小京都だと思っている)
(観光客、30代)



写真 8

復元された金沢城の玉泉院丸庭園
2021年10月31日 金沢にて 小森撮影

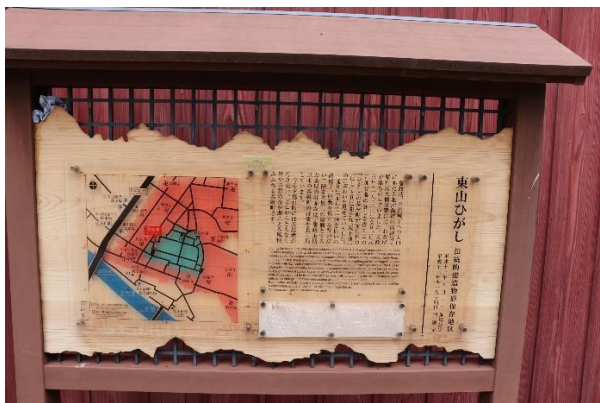


写真 9

ひがし茶屋街案内図
2021年10月31日 金沢にて 小森撮影

3-5.京都

4地点を回った中でそれぞれの地点との関連性を調査した。特に本社にあたる上賀茂神社や稲荷大社

を調べることで京都から地方への文化の流れ、歴史の色付きがみえた。日本の中でも悠久の歴史と豊かな自然に囲まれた街を大切にしてきた先人たちの努力が見て取れた。

京都現地に住む人の反応

- ・小京都が全国にあるのはそれだけ京都が魅力的であるということだ
(40代)
 - ・小京都の存在自体、知らないし聞いたことない
(20代)
 - ・小京都が存在することに特になんの感情も抱かない
(50代)
- と様々で京都に至ってもその知名度は均一ではないことがわかった。



写真 10

伏見稲荷大社
2021年11月6日 京都にて 小森撮影



写真 11

上賀茂神社
2021年11月6日 京都にて 小森撮影

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. 観光協会への問い合わせより

京都市観光協会に対して小京都に関する問い合わせを行った。その回答から小京都のまとめ並びに今後を模索していく。

まず小京都についてのまとめを行う。小京都が現在減少傾向にあることは以下のことが要因である。昭和60年の発足時（27市町）から年々会員数が増加し、平成11年には56市町に達し、これ以降、増減を繰り返しながら現在40市町となっているのは、一つは、加盟都市の厳しい財政状況が続いており、各種団体への補助金及び負担金等の全面的な予算の見直しが行われたことによる、もう一つは、市町村合併や独自の観光戦略の推進により、観光施策の方針転換によると考えられる。結局のところ時勢とともに、観光を取り巻く情勢が変遷しており、やむなく脱退という決断を下すケースが多く見受けられる。

次に観光資源として、全国京都会議の事業趣旨が、全国に点在する小京都と京都ゆかりのまちが手を携え、広域観光連携を主軸とし、共同で観光振興を行っていくことである。そのため小京都もしくは京都ゆかりのまちという共通のキーワードで相互連携を図り、観光PRを推進することにより、相乗効果が得られ、会員市町の認知度やイメージの向上、観光集客等に結び付いていくのである。観光として〇〇の小京都と名乗ることで京都のような悠久の歴史や自然を感じさせ、美しさのイメージを醸し出すことができるというわけである。

最後に今後の小京都である。京都とゆかりの市町が互いに手を携え、悠久の歴史と豊かな自然に培われた伝統や文化の魅力を広く全国に発信し、それぞれのまちのイメージアップと観光客誘致の相乗効果を引き続き図ることが考えられており、コロナ禍により高まる国内旅行需要の取り込みを行なっていく。私たちは小京都を巡ることでその都市ならではの、歴史や文化を感じると共に京都という都市がこれまでいかに人々の心を満たしてきたのかということを考える機会になる。今後旅行を考える上で小京都巡りを考えてみることも良いのかもしれない。

2. 本研究における反省

新型コロナウイルスの影響もあり、私たちにとって思うように活動することが難しかったといえる。特にフィールドワークの度重なる延期については、事後の分析等に多くの時間を費やすことができなかったことは事実である。

3. 今後の展望

今後の展望としては、今回調査した備中高梁・たつの・伊賀上野・金沢・京都の5地域に加え、全国京都会議に加盟する全国の自治体の現状等の把握に広げていく。さらに小京都の発信についても考えていく。今回取り上げた5地域では、それぞれ小京都に対する見方が異なっていた。地域として小京都を積極的に推進する自治体もあれば小京都について推進していくのではなく、独自の観光資源を生かした街づくりを行っている自治体があるなど、十人十色の街づくりが見受けられた。そのことを踏まえ、京都ならびに小京都の素晴らしさを多くの方々に伝える活動を取り組んでいきたいと考える。

また、発見した観光資源についてどのような活用方法があるかについて自らが多面的・多角的な視野から考え、観光資源の有効活用に努めていきたい。

さらに、今回の調査を通して得られた知見を学校における授業にて指導の際に役立てるとともに、子どもたちに対し、自らテーマを設定し調査を行いまとめることの大切さについて伝えていきたいと考える。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。

助言教員の香川貴志先生からはアンケート調査の心得など多大なご指導を賜りました。ありがとうございました。

そして、本研究の趣旨を理解し快く協力していただいた備中高梁・たつの・伊賀上野・金沢・京都の調査対象者の皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。